性行動についてみると、MSM受検者の過去6ヶ月の性交経験率は 97.1%、その相手(複数回答)は、恋人など特定のパートナー55.4%、知り合いや友人(4月～12月のみの回答)38.9%、バーやクラブで知り合った相手 29.2%、ネット出会い系で知り合った相手26.6%、携帯出会い系で知り合った相手15.4%であった。過去6ヶ月間のセックスにおけるコンドーム常用率(4 月～12 月のみの回答)は、オーラルセックスでは4.6%、アナルセックスでは32.1%であった。

表1　大阪土曜日常設検査における受検者に関する概要(MSMとその他別)

	MSM(n=333)		MSM 以外(n=1308)		無回答(n=27)		合計(n=1668)	
	n	%	n	%	n	%	n	%
年齢階級								
10-19 歳	18	5.4	38	2.9	1	3.7	57	3.4
20-29 歳	138	41.4	609	46.6	9	33.3	756	45.3
30-39 歳	134	40.2	437	33.4	8	29.6	579	34.7
40-49 歳	15	4.5	95	7.3	0	0.0	110	6.6
50-59 歳	8	2.4	39	3.0	0	0.0	47	2.8
60 歳以上	0	0.0	9	0.7	0	0.0	9	0.5
無回答	20	6.0	81	6.2	9	33.3	110	6.6
居住地								
大阪	216	64.9	918	70.2	9	33.3	1143	68.5
兵庫	67	20.1	228	17.4	7	25.9	302	18.1
京都	18	5.4	61	4.7	1	3.7	80	4.8
奈良	15	4.5	40	3.1	1	3.7	56	3.4
滋賀	4	1.2	21	1.6	1	3.7	26	1.6
和歌山	2	0.6	6	0.5	0	0.0	8	0.5
その他	10	3.0	20	1.5	0	0.0	30	1.8
無回答	1	0.3	14	1.1	8	29.6	23	1.4

・MSMは感染不安行為が同性間の性的接触と回答した男性

・無回答は不安要因と性別のどちらか及び両方が無回答であった人

表2　大阪土曜日常設検査における受検者に関する概要(MSMとその他別)　(1)

	MSM(n=333)		MSM 以外 (n=1308)		無回答(n=27)		合計(n=1668)	
	n	%	n	%	n	%	n	%
感染不安行為経験場所								
日本国内	309	92.8	1134	86.7	9	33.3	1452	87.1
国外	2	0.6	97	7.4	0	0.0	99	5.9
国内と国外	21	6.3	59	4.5	1	3.7	81	4.9
わからない	1	0.3	3	0.2	0	0.0	4	0.2
無回答	0	0.0	15	1.1	17	63.0	32	1.9
感染不安行為からの期間								
90 日未満	129	38.7	409	31.3	2	7.4	540	32.4
1 年以内	165	49.5	633	48.4	5	18.5	803	48.1
1 年以上前	33	9.9	234	17.9	2	7.4	269	16.1
無回答	6	1.8	32	2.4	18	66.7	56	3.4

・MSMは感染不安行為が同性間の性的接触と回答した男性

・無回答は不安要因と性別のどちらか及び両方が無回答であった人

・*のついた項目は、2004年4月～12月の回答のみ(n:MSM285、MSM 以外 1059、無回答 17、合計 1361)

表 3 大阪土曜日常設検査における受検者に関する概要(MSM とその他別) (2)

	MSM(n=333)		MSM 以外 (n=1308)		無回答(n=27)		合計(n=1668)	
	n	%	n	%	n	%	n	%
受検動機(複数回答可)								
自分にも感染の可能性*	194	68.1	621	58.6	6	35.3	821	60.3
体調に変化あり感染の不安	56	16.8	186	14.2	1	3.7	243	14.6
情報に触れ自分のことも心配*	50	17.5	329	31.1	0	0.0	379	27.8
パートナーの感染がわかった*	14	4.9	8	0.8	0	0.0	22	1.6
新しい恋人できた	38	11.4	147	11.2	1	3.7	186	11.2
恋人と一緒に	30	9.0	92	7.0	4	14.8	126	7.6
性感染症にかかった*	15	5.3	65	6.1	0	0.0	80	5.9
妊娠した	0	0.0	6	0.5	0	0.0	6	0.4
結婚する*	2	0.7	90	8.5	4	23.5	96	7.1
ただ単に知りたい	47	14.1	274	20.9	8	29.6	329	19.7
定期的に受けている	46	13.8	55	4.2	2	7.4	103	6.2
その他	12	3.6	62	4.7	1	3.7	75	4.5
過去の HIV 抗体検査受検経験								
これまで(生涯)	195	58.6	389	29.7	4	14.8	588	35.3
過去 1 年間	121	36.3	217	16.6	3	11.1	341	20.4
過去 1 年間の受検場所(複数回答可)								
病院・医院	15	12.4	58	26.7	1	33.3	74	21.7
保健所	44	36.4	53	24.4	1	33.3	98	28.7
市内夜間検査	18	14.9	26	12.0	2	66.7	46	13.5
当土曜検査*	48	44.9	91	48.1	0	0.0	139	46.6
その他	3	2.5	11	5.1	0	0.0	14	4.1
HIV 関連相談経験(複数回答可)								
経験なし	242	72.7	1139	87.1	23	85.2	1404	84.2
電話相談した	12	3.6	44	3.4	0	0.0	56	3.4
保健所に相談した	8	2.4	28	2.1	0	0.0	36	2.2
検査と一緒に相談した	75	22.5	98	7.5	0	0.0	173	10.4

・MSM は感染不安行為が同性間の性的接触と回答した男性
・無回答は不安要因と性別のどちらか及び両方が無回答であった人
・*のついた項目は、2004 年 4 月～12 月の回答のみ(n:MSM285、MSM 以外 1059、無回答 17、合計 1361)

D. 考察

1. MSM における HIV 感染症の研究について

わが国の MSM における HIV 感染症に対して、1997 年からは厚生労働省エイズ対策研究事業・HIV 感染症の疫学研究(主任研究者・木原正博)に「関東および関西地区における男性同性間の HIV 感染に関する疫学研究」、2000 年からは同エイズ対策研究事業・HIV 感染症の動向と予防介入に関する社会疫学的研究(主任研究者・木原正博)に「男性同性間における HIV 感染の動向と予防介入に関する社会疫学的研究」の分担研究を設け、東京、大阪地域において男性同性愛者(以下、ゲイ)で構成する地域ボランティア組織(以下、CBO)との協働による予防介入研究を行ってきた。また、2002 年からは同エイズ対策研究事業・男性同性間の HIV 感染予防対策とその推進に関する研究が開始し、東京、大阪、名古屋、福岡の地域で、MSM における HIV／性感染症の予防を促進することを目的に、ゲイ CBO による予防啓発プログラムおよび啓発資材の開発とそれらの普及を試行してきた。

これらの MSM に関する研究から、わが国の MSM におけるエイズ関連知識、意識、予防行動、HIV 検査受検行動などが明らかになった。また MASH 大阪

が 2000 年から 3 年間実施した総合啓発イベント SWITCH に組み込まれた HIV/HBV/梅毒の無料匿名検査・相談では受検した MSM の HIV 抗体陽性割合が 3%前後であること、TPHA(梅毒)陽性割合が 15-20%であることが明らかになった。MSM を対象にした HIV 抗体検査は名古屋においても 2001 年から実施され、HIV 抗体陽性割合が 2-3%、TPHA 陽性割合が大阪の成績とほぼ同様であることを示している。HIV、梅毒に関するこれらの成績は、MSM の間では性感染症として HIV が梅毒等と共に流行しており、十分な対策がとられなければ今後大きな流行となることを示唆している。

2. CBO によるプログラム開発とその普及の効果

ゲイ CBO との協働研究により、当事者性のある資材や普及方法が開発され、ゲイ対象の商業施設やゲイメディアの協力を得るなど、ゲイ CBO が有する人的ネットワークを活用して、MSM に訴求性のある資材と普及プログラムを構築してきた。MASH 大阪は避妊具として定着しているコンドームのプレゼンスを高めるために、オリジナルのコンドームキット(ローションとコンドームのセット)をゲイバーに年間 5 万個以上を配布するアウトリーチを展開し、さらにコミュニティの情報に予防のメッセージをくるんだコミュニティペーパー(SaL+、サルポジ)をアウトリーチ対象のゲイバーおよそ 200 店舗におよそ 5000 部/月を配布した。これらのプログラムの効果については、ゲイコミュニティで開催されている既存のクラブイベントの参加者を対象にした質問紙調査を毎年実施し、疫学研究者の分析結果をもって評価してきた。その結果、MASH 大阪のこれらのプログラムにより、大阪の MSM では HIV 抗体検査受検行動が 1999 年の 19%から 36%に、コンドーム使用は、常用率が低かった特定相手とのアナルセックスにおいて 10%以上向上するなどの成果がみられた。特に、SaL+の配布が貢献していたことが明らかとなっている。

MASH 大阪のコミュニティペーパーはバー顧客の 70%が手にしており、同様の手法が他地域でも導入しつつある。また、啓発効果やニーズ評価の調査も他地域を参考にしつつ実施している。各地域のゲイ CBO が啓発プログラムを共有することは HIV 感染対策をより促進するものと思われ、CBO の連携と啓発活動の向上を目指して合同検討会を開催した。

地域のゲイ CBO との協働による HIV 感染対策に関する取り組みは、東京、大阪、名古屋ともに 2000 年前後から開始したもので、資材の開発やその普及プログラムの実施、またゲイコミュニティでの認知など基盤が構築されたところである。2003 年からエイズ予防財団の試行的事業として、東京、大阪、名古屋で MSM を対象とする HIV 感染対策の活動拠点(以下、コミュニティセンター)が設けられたが、ボランティアを中心とするゲイ CBO の活動体制についても、地方自治体のエイズ対策に MSM 対象の事業が組み込まれにくいといったことを含め、継続的な MSM への HIV 感染対策を構築するには多くの課題を残している。

CBO 活動の継続は個人のボランティア意識に依存するところが大きく、当研究は研究的側面に加え CBO 運営を含めた事業的要素が大きい。地域行政と CBO 協働のエイズ対策事業設置が望まれる。

わが国の MSM における HIV 感染症の発生状況は、必ずしも楽観視できるものではなく、特に HIV 陽性者の多くを占める男性同性愛者への保健・医療・福祉サービスおよび社会における労働の確保などは、受療行動および QOL を高める上で重要である。HIV 感染の予防を推進すると共に社会における同性愛者、HIV 陽性者への偏見・差別を改善する取り組みも今後の HIV 感染対策を推進するために重要と考える。HIV 陽性者と共に生きることの意識化を図る企画は、陽性者を含めた HIV 感染対策の基盤構築として評価される。

3. 啓発プログラムの効果評価調査について

1)バー調査の導入

MASH 大阪が予防啓発のアウトリーチ活動を行っているクライアントに対して、商業施設(ゲイバー)の協力を得て精密な質問紙調査を実施した。このような調査は大阪のみならず本邦では初めてことである。MSM における HIV 感染対策プログラムをより有効なものとしていくためには、常にクライアントの視点にたったニーズを評価していくことが重要である。

従来のクラブイベント参加者対象の調査に比べて研究参加者の層が異なっており、結果の解釈については、両調査の相違性を検討することが必要である。

この研究成果を踏まえ、予防活動の達成度を評価する一方で、介入が行き届いていない層を明確化するとともにその層に対していかに効果的に働きかけるかを考案していく必要がある。またコンドーム使用行動の変化ステージに関連する因子をより明確にし、より対象者を維持期に向かうことを支援するにはどのような因子に働きかけることが効果的なのかを考慮に入れた予防活動を実施することが望まれる。

2)インターネットサーベイ

インターネット利用層を対象とした調査は 5000 人を越える MSM の研究参加者となり、アジアにおいても最大規模の MSM ネット研究となった。わが国における MSM 研究において過去最高の研究参加者数となり、得られた情報も全国的な動向を把握するものとなった。研究参加者の最低年齢は 12 歳、最高年齢は 82 歳でありこれまでのわが国における MSM 対象のインターネット調査のどれよりも年齢層の幅が広がり、学歴においても大卒以上割合がこれまでで最も低く、インターネット利用者および研究参加者の層が拡大してきたと言える。本研究ではゲイサイトへのバナー広告掲載に加えて、mixi での告知、Yahoo オーバチュアの活用によって、より多くのインターネット利用者に研究実施を周知できたと考える。

研究参加者数が 2003 年の調査よりも倍増したことにより、年齢階級別および居住地域別の詳細な分析が可能となり、オンラインモニタリングを経年的に開始していく基盤が整ったと考えられる。同様の調査を研究 3 年度目に実施し、MSM 研究における本調査手法の有用性を含め、全国の MSM の受検動向、性行動、メンタルヘルス等の変化を評価していく予定である。

3)社会学的視点からの調査

ゲイコミュニティにおいて HIV 感染症がどのように捉えられているのか、情報の伝達や入手に関する社会的ネットワークはどのように働いているのか、社会的ネットワークの中で個人レベルではどのように対応しているのか、などの点について、わが国ではほとんど明らかにされていない。HIV 感染症に関する啓発を進めるには、これらのことを解明していくことも必要と考える。次年度以降は、社会学的、都市人口学的な視点を加えた研究と社会的ネットワークを探る研究を本格的に導入していく予定である。これらの研究はおそらくは新たな予防啓発の方向性を示すものと期待される。

4. 自己評価

1)達成度について

東京、名古屋、大阪、福岡では従来の啓発活動を継続しつつ新たな啓発ニーズを検討した。東京・新宿の啓発活動に接触している層は検査行動、予防行動が高く、コミュニティベースの活動の効果が現れつつある。地方都市・仙台では研究基盤が整いCBOによる啓発活動が開始した。他の地方都市については当事者との連携の可能性を検討した。

2)研究成果の学術的・国際的・社会的意義について

MSM の現状を最も的確に把握し、ゲイコミュニティに基盤をおくCBOが研究者と協働しながら感染拡大への対応を担っている。その活動範囲は MSM に訴求力のある啓発資材の開発からコミュニティセンターの運営まで多岐である。啓発資材や普及手法は他の個別施策層、地域社会においても有用なものと評価され、このような CBO の活動はわが国の HIV 感染対策上の先駆的試みとして意義あるものと考える。

3)今後の展望について

15－24 歳の若年層ではHIV感染例が、中高年層ではエイズ報告例が増加していることから若年層と40歳代以上の年齢層への啓発介入の強化が望まれる。地方都市部の MSM への取り組みを具体化するとともに、インターネット利用層への予防介入も心理的要因を含めて試行していく予定である。また、新たなニーズ評価や啓発普及の手法開発のために社会学的質的調査や社会的ネットワーク調査などを導入する。

E. 結論

東京、名古屋、大阪、福岡では商業施設等を介した予防啓発の継続によって、効果的かつ継続的な予防啓発体制が構築され、各地域における MSM への HIV 感染予防対策が促進されつつある。コミュニティセンターの存在は地域の活動を定着し、MSM に訴求力のある啓発資材の開発普及を可能にし、行政、他の CBO との連携を促進している。また陽性者の視点を含めた HIV 感染対策は重要であり今後さらに強化したい。

F. 発表論文等

主任研究者:市川誠一

論文発表

1)Hidaka, Y., Ichikawa, S., Koyano, J., Urao, M., Yasuo, T., Kimura H, and Kihara M : Profile of substance use and sexual practices among Japanese men who have sex with men recruited through the Internet, (J of Urban Health, 投稿中)

2) Zamani, S., Kihara, M., Gouya, M.M., Vazilian, M., Ono-Kihara, M., Razzaghi, E.M., and Ichikawa, S.: Prevalence of and factors associated with HIV-1 infection among drug users visiting treatment centers in Teheran, Iran. AIDS 19(7):709-716, 2005

3) Zamani, S., Kihara, M., Gouya, M.M., Vazilian, M., Nassirimanesh, B., Ono-Kihara, M., Mortazavi,

R.S., Safaie A., and Ichikawa, S.: High prevalence of HIV infection associated with incarceration among community-based injecting drug users in Teheran, Iran. J. of AIDS ((in press)

和文

1)橋本修二、井上洋士、川戸美由紀、村上義孝、木村博和、市川誠一、中村好一、木原正博、福富和夫:HIV 感染からその自覚と医療施設の受信までの時間的流れ、日本エイズ学会誌、第7巻1号、31-36、2005.

口頭発表

1) Ichikawa Seiichi, Satoh Mioo, Utsumi Makoto, Onizuka Tetsuro, Yamamoto Masahiro, Kimura Hirokazu: Preventive enlightment by gay CBO in Japan Seventh International Congress on AIDS in Asia and the Pacific July 3, 2005 Kobe

2) Hidaka Yasuharu., Ichikawa Seiichi., Koyano Junko, Urao Michiko, Yasuo, T., Kimura H, Kihara M.: HIV testing behavior among Japanese Men who have Sex with Men 7th International Congress on AIDS in the Asia and the Pacific, 2005.7.3., Kobe

3) Hasegawa Hiroshi, et al.: Intervention in vulnerable community-A case study of intervention in a gay community in Fukuoka, local city in Japan. Seventh International Congress on AIDS in Asia and the Pacific July 2, 2005 Kobe

4)Yanagibori Ryoko, Ichikawa Seiichi, Takasu Mika., Shirai Midori, Kusakari Junko: The attitude toward HIV/AIDS prevention in University students 7th International Congress on AIDS in the Asia and the Pacific, 2005.7.3., Kobe

5)Tachibana Tomoko, Abo Mitsuru, Maeda Hideo, Tanihata Takeo, Ichikawa Seiichi: Assessment of factors associated with the interval between anxiety about infection and voluntary HIV testing, Tokyo 7th International Congress on AIDS in the Asia and the Pacific, 2005.7.3., Kobe

6)木村博和、鬼塚哲郎、辻宏幸、市川誠一:大阪地域におけるMSM向けHIV/STI予防啓発アウトリーチ、第64回日本公衆衛生学会総会、平成17年9月15日、札幌市

7)市川誠一、日高庸晴、古谷野淳子、木村博和:HIV 予防啓発における対人援助職と行政の役割、第64回日本公衆衛生学会 自由集会, 平成17年9月14日、札幌市

8)井上洋士、村上未知子、有馬美奈、市橋恵子、岩本愛吉、大野稔子、山元泰之、関由紀子、山崎喜比古、市川誠一、木原正博:HIV 感染者向けのセックスライフ・ハンドブック作成の試み、第 19 回日本エイズ学会学術集会・総会、平成17年12月3日、熊本

9)岳中美江、後藤哲志、土居加寿子、松浦基夫、榎本てる子、藤山佳秀、市川誠一:大阪・土曜常設HIV抗体検査事業における受検者の動向、第 19 回日本エイズ学会学術集会・総会、平成 17 年 12 月 1 日、熊本

分担研究者

佐藤 功

論文発表

1)佐藤 功:宮城県でも感染拡大の HIV 感染症、宮城県医師会報 716:15-17、2005.

2)田上恭子、佐藤 功、伊藤俊広、菅原美花、鈴木智子:東北地方における HIV 感染者への心理的支援に関する研究～HIV カウンセリングにおける情報提供に着目して～弘前大学教育学部記要 94:117-123. 2005.

3)片倉道夫、佐藤 功、伊藤俊広:HIV 感染症に合併するトキソプラズマ症の実態調査、エイズに合併する寄生虫症、発行:フリーズ社 15－17、2005.

口頭発表

1)鈴木博義、伊藤俊広、他:病理組織診断に苦慮している脳病変をもつ AIDS の 1 例、第 12 回東北神経病理研究会、2005 年 10 月 15 日、福島

2)伊藤俊広:東北地方における HIV 感染の現状、第 16 回日本エイズ教育学会、2005 年 10 月 16 日、仙台市

3)小住好子、伊藤俊広、佐藤 功 、菅原美花、他:HIV 専門外来における薬剤師の関わり、第43回東北地区国立病院機構薬学研究会、2005 年 11 月 26 日、仙台

4)伊藤俊広、佐藤功:当院の性感染性 HIV/AIDS 患者における STD の実際、第 19 回日本エイズ学会、2005 年、12 月 1 日、熊本

5)宇佐美修、佐藤 功、他:東北地方の HIV 感染者の臨床症状とウィルス特性、第 19 回日本エイズ学会、2005 年 12 月 1 日、 熊本

佐藤未光
口頭発表
1) Ichikawa Seiichi, Satoh Mioo, Utsumi Makoto, Onizuka Tetsuro, Yamamoto Masahiro, Kimura Hirokazu: Preventive enlightment by gay CBO in Japan Seventh International Congress on AIDS in Asia and the Pacific July 3, 2005 Kobe

内海 眞
(英文)
1) Nagai H, Wada K, Morishita T, Utsumi M, Nishiyama Y, Kaneda T.: New estimation method for highly sensitive quantitation of human immunodeficiency virus type 1 DNA and its application、J. Virol. Meth.124、157-165,2005
(和文)
1) 内海 眞:日本におけるHIV感染症/エイズの現況、日農医誌 54(4)、723-733、2006

口頭発表
1) Seiichi Ichikawa, Mioo Satoh, Makoto Utsumi, Tetsuro Onizuka, Masahiro Yamamoto, Hirokazu Kimura: Preventive enlightment by gay CBO in Japan Seventh International Congress on AIDS in Asia and the Pacific July 3, 2005 Kobe

鬼塚哲郎
論文発表
(和文)
1) 辻 宏幸、鬼塚哲郎:MASH 大阪によるゲイコミュニティ向け HIV/STI 予防活動、保健師ジャーナル、第 61 巻、第 2 号:184-188、2005

口頭発表
1) 木村博和、鬼塚哲郎、辻宏幸、市川誠一:大阪地域におけるMSM向けHIV/STI予防啓発アウトリーチ、第 64 回日本公衆衛生学会総会、平成 17 年 9 月 15 日、札幌市

山本政弘
論文発表
(欧文)
1) Rumi Minami,Masahiro Yamamoto,Asuka Horita, Tomoya Miyamura, Kensuke Izutsu, Eiichi Suematsu: "Elevated serum levels of RCAS 1 are associated with a Poor recovery of the CD4+T cell count after ART in HIV-1-infected patients" AIDS Research (in press)

口頭発表
1) Rumi Minami,Masahiro Yamamoto,Asuka Horita, Tomoya Miyamura, Kensuke Izutsu, Eiichi Suematsu: HIV-Tat protein increased the expression of apoptosis-associated protein RCAS1 in CD4+ cells and monocytes. Seventh International Congress on AIDS in Asia and the Pacific July 2, 2005 Kobe
2) Seiichi Ichikawa, Mioo Satoh, Makoto Utsumi, Tetsuro Onizuka, Masahiro Yamamoto, Hirokazu Kimura: Preventive enlightment by gay CBO in Japan Seventh International Congress on AIDS in Asia and the Pacific July 3, 2005 Kobe
3) Hiroshi Hasegawa, et al.: Intervention in vulnerable community-A case study of intervention in a gay community in Fukuoka, local city in Japan. Seventh International Congress on AIDS in Asia and the Pacific July 2, 2005 Kobe
4) Wataru Sugiura, Rumi Minami, Masahiro Yamamoto et al.: Multi-center Nationwide Survey of Drug-Resistant HIV-1 in Newly Diagnosed HIV/AIDS Patients in Japan from 2003 to 2004.
5) 南留美, 山本政弘:高熱を繰り返したのち発症した HIV-1 陽性 HHV-8 関連 Castleman 病の一例 第 19 回日本エイズ学会学術集会・総会 平成 17 年 12 月 1 日 熊本
6) 杉浦 亙、潟永博之、吉田 繁、千葉仁志、浅黄司、松田昌和、岡 慎一、近藤真規子、今井光信、貞升健志、長島真美、伊部史朗、金田次弘、浜口元洋、上田幹夫、正兼亜季、大家正義、渡辺香奈子、白阪琢磨、山本善彦、森 治代、小島洋子、中桐逸博、高田 昇、木村昭郎、南 留美、山本政弘、健山正男、藤田次郎:新規 HIV-1感染者における薬剤耐性の頻度に関する全国疫学調査—2003 年から 2004 年にかけての報告 第 19 回日本エイズ学会学術集会・総会 平成 17 年 12 月 2 日 熊本
7)辻麻理子、山本政弘、城崎真弓、井上 緑、山田淳子、本松由紀、矢永由里子:医療と行政による検査/相談/医療の環境改善を目的とした取り組み -多職種による講義と実践の研修会を通して- 第 19 回日本エイズ学会学術集会・総会 平成 17 年 12 月 2 日 熊本

Ⅱ. 分担研究報告

厚生労働省科学研究費補助金　エイズ対策研究事業
男性同性間のHIV感染対策とその評価に関する研究

東北地域における同性間のHIV/STI感染予防啓発の普及促進に関する研究

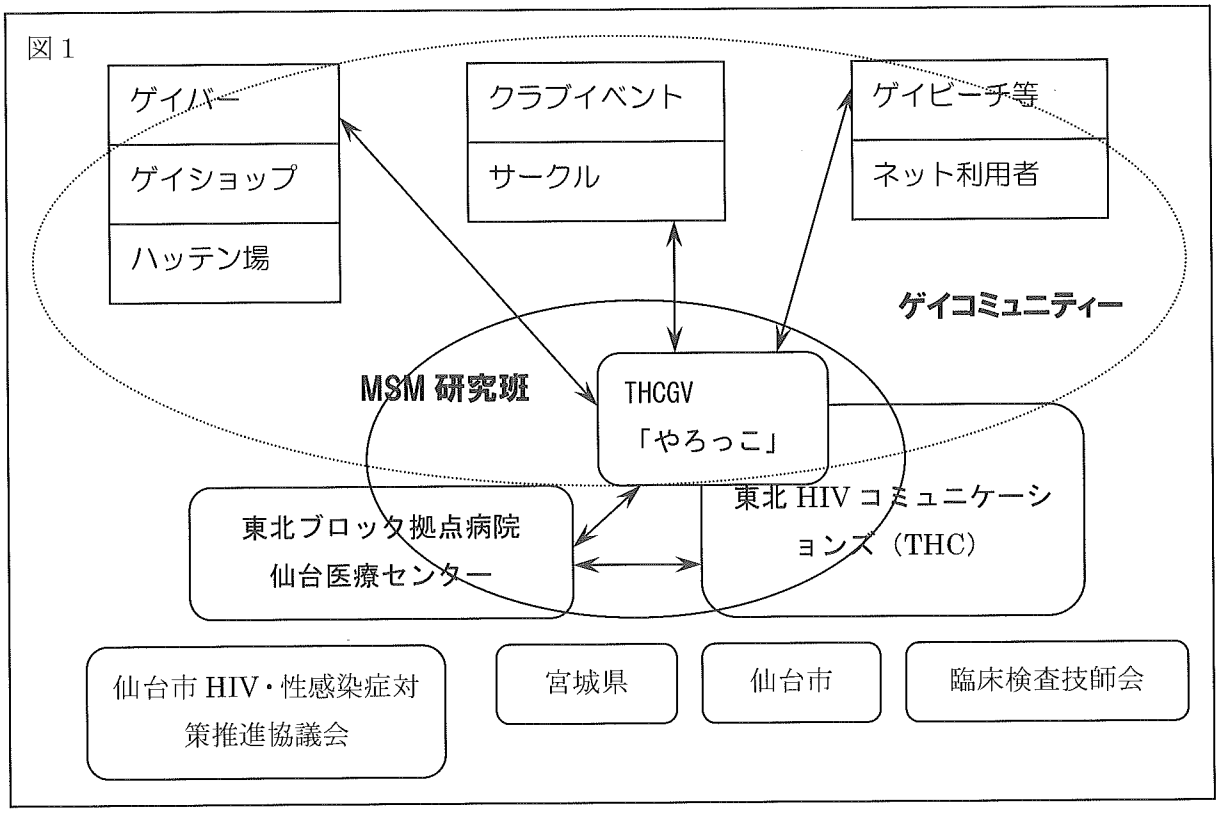
分担研究者：佐藤功（国立病院機構　仙台医療センター）
研究協力者：小浜耕治、太田貴（東北HIVコミュニケーションズ）
伊藤俊広、佐藤愛子、鈴木智子、菅原美花（国立病院機構　仙台医療センター）

研究要旨

東北地域の拠点病院に対し、10月時点の診療状況のアンケートを実施した。その結果MSMのHIV陽性者は、平成13年度に比して倍以上となっている。東北ブロック拠点病院である仙台医療センター、東北HIVコミュニケーションズおよびその中のボランティアグループ：THCGV「やろっこ」が協働してHIV感染拡大防止を行うための基盤構築を行った（図1）。

感染者状況を把握するための取り組み、行政など関係各機関との連携体制の構築、ゲイコミュニティーに対する取り組みの3方面の活動を試行し、活動を展開していくのに必要な各方面との関係作りが進んだ。また、ゲイコミュニティーの状況把握のための予備的調査を通じて、今後の東北地域の予防啓発に必要な視点を得ることができた。

今年度の取り組みを通じて、規模の小さなゲイコミュニティーでの連携構築の困難さ、人材確保や管理体制構築の難しさ等、今後の課題が明らかとなった。



A. 研究目的

動態調査によると東北地方における HIV 感染者累積数は平成17年末現在、226名となり、1年間で28名の増加となった。中でも宮城が11名、青森が9名と増加が顕著であった。特に青森が今まで年に1~2名であり、地方へのHIV感染の拡大が懸念される。

このような傾向は、近年の東北ブロック拠点病院である仙台医療センターの受診者にも見られ、男性同性間対策への問題意識が高まっていた。仙台地域のゲイコミュニティーは、商業施設ではバー20軒、ショップ2軒、ハッテン場3軒、その他年間3～4回のクラブイベント、バー主催が多いスポーツサークル等の非商業的な活動、ゲイビーチや公園などの野外系コミュニティー、ネットユーザーなどが考えられる。平成5年から活動している東北HIVコミュニケーションズ（THC）でも当初からゲイサークルとのつながりがあり、このようなコミュニティーに対する活動に関心を持っていた。平成12年ごろから大阪など他地域での取り組みを取材するなど準備を始め、平成16年にはゲイのメンバーによるゲイのための予防啓発チームTHCGV「やろっこ」(仙台地方の方言で「男の子」の意)をTHC内のボランティアグループとして立ち上げ、仙台のゲイコミュニティーに対する活動を開始していた。

この3者によってMSM研究班東北グループを結成し、東北地方のMSMにおけるHIV感染拡大阻止の研究体制の構築、啓発活動、ゲイコミュニティー及び関連機関との連携構築を行うための研究を開始した。

東北地方は、ゲイコミュニティーの規模が小さく、全体像が把握しづらい。また、増加傾向は看過できないが、感染者・患者報告数は他地域に比べると少なく、HIV問題に対する社会の関心は低い。こうした中小規模の地方に共通する状況の中で、効果的な予防対策を推進するために必要な諸条件を明らかにし、具体的な施策を提案していくことを目的とし、初年度である17年はそのための体制作りを行った（図1)。

B. 研究方法

本研究は東北ブロック拠点病院である仙台医療センター、東北HIVコミュニケーションズおよびその中のボランティアグループ：THCGV「やろっこ」が協働してHIV感染拡大防止を行うための基盤構築を行った。今年度実施項目は以下の通りである。

1. 東北全体の HIV 感染者把握のため拠点病院に対してアンケート実施とその解析。
2. ゲイコミュニティー向けの啓発予防チームの育成と活動の展開。
3. ゲイコミュニティーとの関係構築。
4. 各関係機関との連携構築。
5. ゲイコミュニティーの状況に関する予備調査。
6. 啓発資材の開発。

この中で、仙台医療センターは感染者状況を把握するための取り組みを、THCは行政など関係各機関との連携体制の構築を、THCGV「やろっこ」はゲイコミュニティーに対する取り組みを主として担当し、それぞれの課題を把握しながら、地域におけるMSM対策に協働して取り組むための体制作りを行った。

C. 研究結果

1. 東北全体のHIV感染者把握のため拠点病院に対してアンケートを実施し、その結果を解析した。

17年は40施設から返答を頂いた。平成17年10月現在、東北の全拠点病院の診療HIV感染者総数は190人であった。平成13年11月のそれは132人であり、4年間で58人の増加が見られた。感染経路別で見ると、血友病に於いては、13年は75人であったが、17年は63人に減少していた。この中の多くは重複感染のC型肝炎関連疾患で死亡していると思われる。異

性間においては31人から59人と2倍弱の増加が見られ、MSMにおいては23人から53人と2倍強の増加が見られた。両性間は7人、不明は8人であったが、不明の殆どはMSMと考えられ、異性間においても幾人かは MSM であると推測され、実際にはMSMが感染経路別では一番多くなっていると考えられた（図2）。

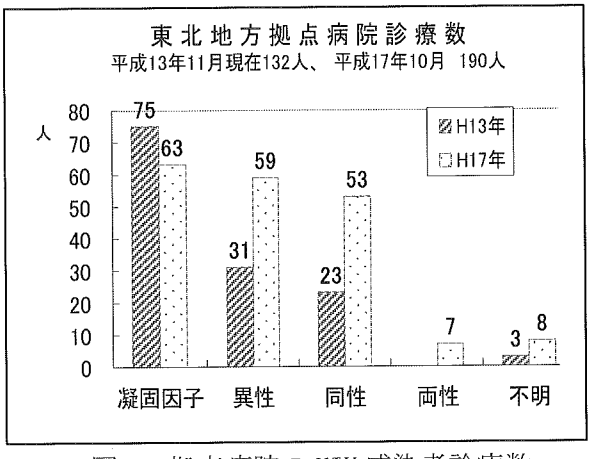


図2. 拠点病院のHIV感染者診療数

県別では、図3に示したが、宮城が丁度半数の95人、青森と福島が27人、秋田と山形が14人、岩手が13人であった。感染経路別では異性間が一番多いのは青森、岩手、山形で、血友病が一番多いのは秋田、宮城、福島であった。

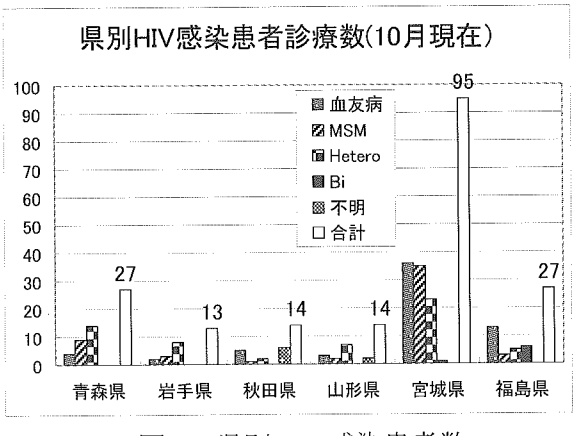


図3. 県別HIV感染患者数

図4に仙台医療センターの新患患者数の推移を示した。平成18年2月末現在、累積総数134人となった。感染経路別では血友病49人、MSM 48人、ヘテロ37人、そのうち12人が女性であった。平成9年にエイズブロック拠点病院に選定された時、血友病のHIV感染者が25人当院を受診した。その後次第に性感染者が増えてきた。殊に、MSM が顕著担ってきており、平成17年の1年間で、新たに13人のMSMのHIV感染者が受診した。

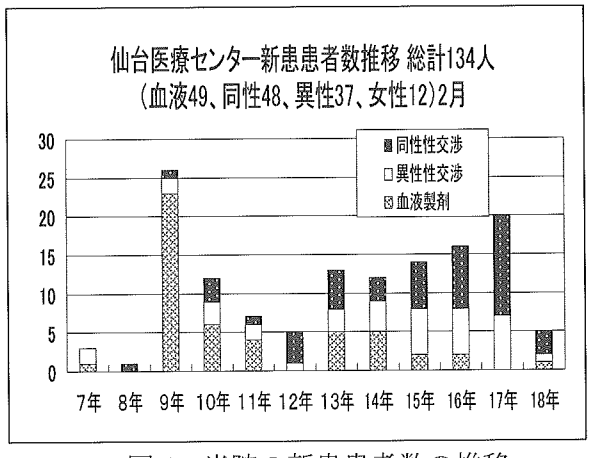


図4. 当院の新患患者数の推移

当院初診年齢分布を図5に示す。血友病は30代が最も多く、以下20代、10代、40代、50代、60代。ヘテロは30代、20代、40代、50代、60代、MSMは若い順に多かった。

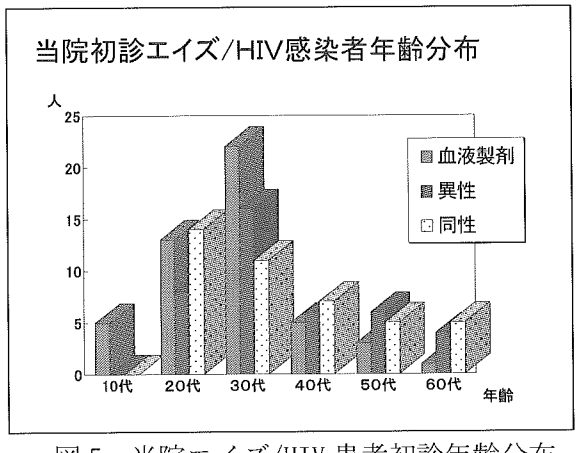


図5. 当院エイズ/HIV患者初診年齢分布

HIV感染者の初診理由は図6に示した。保健所、献血時、手術時、妊娠時等の検診の時に HIV感染が明らかとなったHIV感染者は37人であった。病的理由によるは48人であり、免疫障害による合併症はカリニ肺炎11人、口腔内カンジダ症、結核、が4人等33人であり、他の

STDは梅毒が6人、アメーバー赤痢が4人等12人であった。急性期は3人、その他で前立腺炎、アレルギー性肺炎各1人づつであった。

性行為によるHIV感染者の受診理由

1. 検診などによる抗体陽性の指摘	**37例**		
2. 何らかの病的理由	**48例**		
1)カリニ肺炎	11	11)帯状疱疹	1
2)梅毒	6	12)尖圭コンジローマ	1
3)アメーバ赤痢	4	13)ギランバレー症候群	1
4)口腔内カンジダ症	4	14)原因不明の神経症状(脳症？)	1
5)結核	4	15)前立腺炎	1
6)急性期	3	16)アレルギー性肺炎	1
7)悪性リンパ腫	2	17)性器ヘルペス	1
8)脂腺性湿疹	2	18)HIV脳症	1
9)カポジ肉腫	3	19)トキソプラズマ脳炎	1
10)クリプトコッカス髄膜炎	2		
		総　計	**81**

図6．性感染性HIV感染者の受診理由

2. ゲイコミュニティー向けの啓発予防チームの育成と活動の展開

1) THCGV「やろっこ」ミーティング

月1回のミーティングを開催し、ゲイコミュニティーの現状やHIV感染症についてレクチャーを行い、現在までの参加総人数43名となり、10名を育成した。また、他地域のコミュニティーイベント（NLGR、AIDS文化フォーラム、TLGP、レインボーマーチ札幌）へ参加し、その報告を行い、全国の情勢を共有した。

今後、メンバーを増やし、定着を図る必要がある。

2) ゲイコミュニティーに対する啓発活動

啓発イベントの開催と、アウトリーチ活動を行った。

啓発イベントは、クラブパーティー、映画上映会、写真展、シャンソンショーと、多様な形態を試行し、4回のイベントを開催した。コミュニティー内での話題作りをして活動の認知をはかり、イベントでどのような予防啓発の情報提供ができるかを念頭におき、企画した。

・5月3日（祝）

GAMBAれナイノ（クラブイベント）　75名

・9月30日（金）

hands上映会（NLGR映画）3名

・10月29日(土)

風のひろば-全国コミュニティーイベントから仙台へ-（全国のゲイイベントの写真展）

・12月24日(土)

黒いクリスマス～シャンソンとリーディングの夕べ　14名

アウトリーチ活動は、身近にHIVに関する情報が得られ、コミュニティーでHIVを話題にしやすい環境作りを目的とし、コンドームと前年度に宮城県と協働して制作したカード(簡単な知識と、地元の検査・相談窓口情報を掲載）を配布した。

・ゲイバーへのコンドーム配布（随時）

仙台市内20軒中8軒に配布

・クラブイベントでのコンドーム配布（4回）

5月4日(休)　クラブイベントA

8月6日(土)　クラブイベントA

9月10日(土)　クラブイベントB（郡山）

12月17日(土)　クラブイベントC

・東北地区飲食店対抗バレーボール大会

5月4日(休)

10月29日(土)（後述のアンケート実施）

・LOVE BEACH PROJECT

仙台地区のゲイビーチの清掃活動とあわせて、コンドームを配布した。7月30日(土)、10月23日(日)の2回実施した。

3. ゲイコミュニティーとの関係構築

前述の各イベント開催時、バーとの連携体制を意識し、GANBAれナイノの共催、バー主催のバレーボール大会での啓発活動など、連携の実績をつくり、「THCGV やろっこ」および研究班の認知を高められた。LOVE BEACH PROJECTでは清掃活動をあわせて行い、ゲイビーチの環境美化に貢献すると共に、ビーチの顔役的人物との関係作りができた。今後活動のコミュニティーへの訴求効果を高めるために、これらの連携先との関係を維持し、深める必要がある。

4. 各関係機関との連携構築

1) ロビー活動

主任研究者・分担研究者・研究協力者と行政機関（宮城県・仙台市）と会談を行い、研究事業の説明と協力を依頼した。

2) THC サポーター学習会の開催

東北 HIV コミュニケーションズと共に関係者向けの学習会を 3 回開催、地元保健関係者、教育関係者、NPO などの参加があり、仙台地域における MSM の感染対策に関する共通理解を得られた。

・7 月 31 日(日)繋がり-ゲイコミュニティーと諸機関の連携を考える-
・8 月 28 日(日)宮城の HIV 検査を考える学習会
・12 月 24 日(土)セクシュアリティー・HIV・メンタルヘルス

3) 世界エイズデーみやぎ・せんだいを共催

仙台市、宮城県、宮城県臨床検査技師会、THC が連携した一般向けの啓発イベントに参画した。20 代、30 代で全体の 70.9%を占めた(図 7)。

研究班からは 12 月 14 日(水)～25 日(日)で my first safer sex 展を提供。具体的な連携実績を作ることができた。

4) 仙台市 HIV 迅速検査参加

仙台市が実施した臨時の HIV 迅速検査試行（1 月 7 日開催）に参加し、地域の検査体制について協働して検討した。

5) 仙台市 HIV 性感染症対策推進協議会への参画

仙台市 HIV 性感染症対策推進協議会が 17 年度から改組され、研究班より 2 名が参加。地域の HIV 感染対策について、各機関が戦略を共有し取り組む体制作りが始まった。

5. ゲイコミュニティーの状況に関する予備調査

地域のコミュニティーの状況を把握するため、前述のバレーボール大会においてアンケートを実施し、ゲイバー利用者の HIV についての意識と日常の予防行動について調査した。

図 7

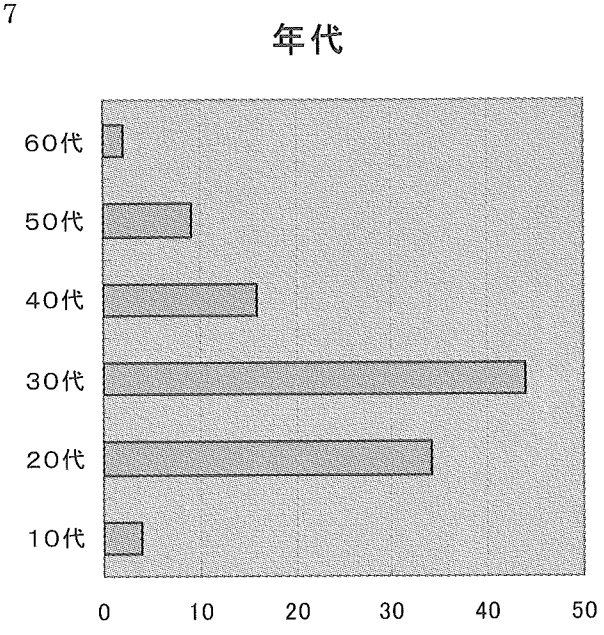


図 8

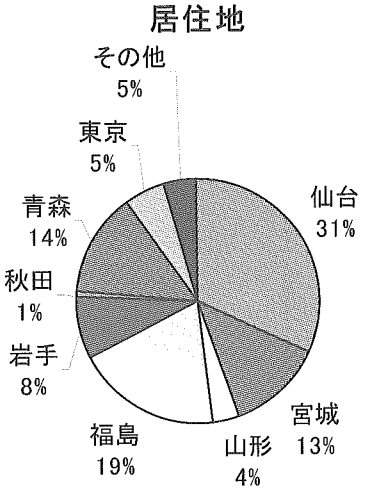


図 9

HIVへの関心

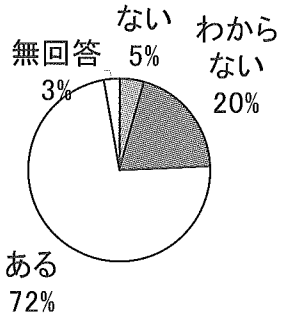


図 10

陽性者の知人の有無

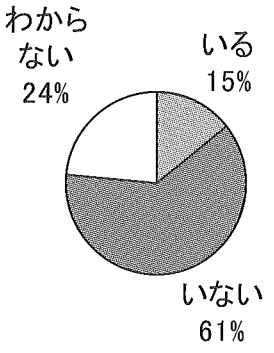


図 11

コンドームの使用(タチ)

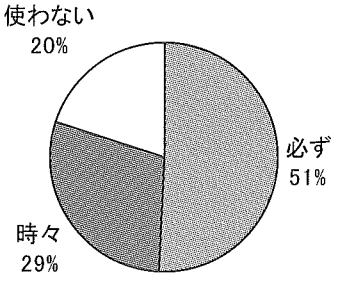
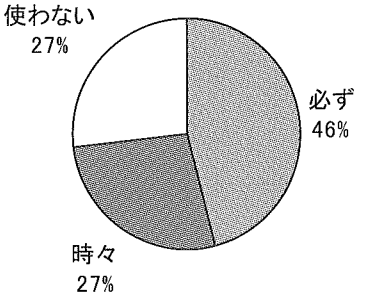


図 12

コンドームの使用(ウケ)



10代から60代の110名から回答を得られたが、仙台を中心とする宮城県内在住のものが半数近くであるが、東北各県から参加者があった(図 8)。

HIV に関心があると答えたのは7割を超え、問題意識を持った人が多数派である(図 9)。陽性者の知人がいる人は 15%と少ないが、全くいないわけではなく、東北の陽性者も一定数の人が周囲にカミングアウトしていることが推察される(図 10)。

感染予防に関する行動をみると、コンドーム常用率が50%前後で(図 11、12)、他地域が活動を始めた初期の状況と大差ない。しかし、自分自身の感染の可能性がない、ほとんどないと答えている人が57%に達している(図 13)。これは他地域と比較すると倍近くにおよび、顕著な差が認められる。過去1年間のHIV抗体検査受検率も14%と低い(図 14)。HIV感染の状況をより楽観的に捕らえていて、セイファーセックスの次の二次予防=受検行動につながっていないと考えられる。

図１３

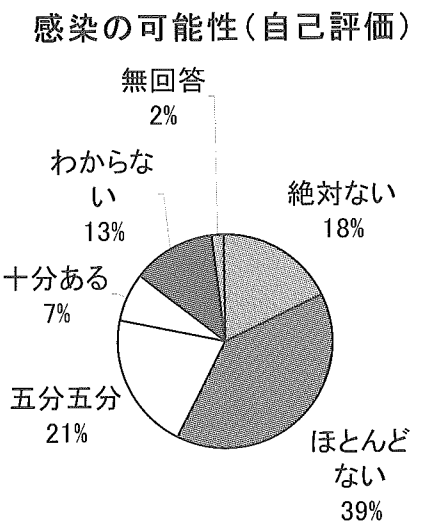
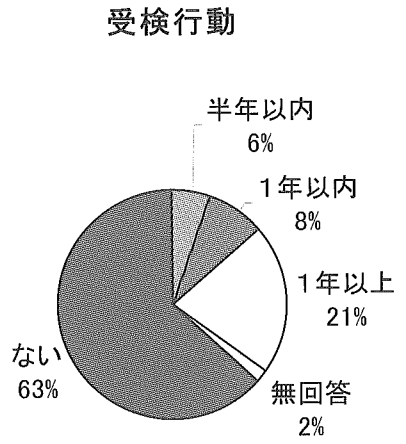


図１４



6．啓発資材の制作

バー、ホームページなどで地元版コンドームパッケージのデザインを募集し、オリジナルの啓発用コンドームを作成した。8点の応募があり、その中からデザインを選定し制作した。来年度から配布する予定である。

D. 考察

東北の拠点病院へのアンケートの解析等から東北地方においても、例外でなく性感染性HIV 感染者が右肩上がりの増加していることが明らかとなった。しかも、MSMにおいて平成13年の2倍以上の増加が見られており、早急な取り組みが必要と考えれた。また、医療機関においてもHIV感染症の認知度が低く、診断に遅れをとっているところが見られ、医療機関への啓蒙の充実を図ることも重要と思われる。平成17年度から市川班の班員としてTHC(THCGV)と共働して、MSMにおける感染予防啓発のための研究を開始した。

今年度は初年度であり、先行班員の取り組みを参考にして計画を立て、実施してきた。これらの取り組みの中で以下のように東北地域のゲイコミュニティーの特性と、研究を推進するために必要な条件が次のように浮き彫りにされた。

① ゲイコミュニティーとの距離感

東北におけるゲイコミュニティーは規模が小さく、バレーボール大会のようなイベントもあるが、コミュニティー内でのつながりを促進する動きは稀薄である。イベントなどで一時的な連携ができても、継続的な関係維持が難しい。また、THCGVのメンバーに、バー利用者などのコミュニティーの中核層が集まりにくく、コミュニティーのニーズを体感しづらい。

② 予防啓発、調査を実行する人材不足

すでにクラブイベントなどをオーガナイズしている人材は自身の活動で忙しく、研究事業への参画が難しい。協力の呼びかけ方に工夫が必要である。

③ マネージメント体制確立の困難さ

ゲイコミュニティー、NPO、研究班各々の特性があり、一体となった体制作りには時間がかかる。

④ 地域の諸機関との連携の更なる強化

仙台市HIV性感染症対策推進協議会は17年度

から改組され、具体的な方針の策定途上である。宮城県・仙台市の連携事業も、17 年度にはじめて実現した。さらに実効ある連携体制を探っていく必要がある。

予備調査の結果から、コンドーム常用率はインターネット調査等で知られているものより高い値が得られ、東北地区のバー利用者は一定の予防行動を行っていることが判った。すでに雑誌などから「予防が必要」という情報は伝わっていて、コミュニティー内でのコミュニケーションに反映していると推察される。しかし、周囲に陽性者の知人がいないなど、HIV 問題をより身近に現実的に感じて検査を受けるなどの行動に踏み出す人はまだ少ない。セイファーセックスを語りやすい環境作りと、陽性者との共生を考えられるような情報・機会の提供という 2 つの側面を意識して活動を行う必要がある。

また、すでにセイファーセックスに関する機運が高まっているコミュニティーが存在するのであるから、ここへのアクセスを容易にしてコミュニティー自体を盛り上げて行くことが、MSM 全体の予防行動の改善につながると考えられる。

このような地域の特徴から考察すると、今回協力が得られたコミュニティーに対して、バーのマスターやクラブオーガナイザーなどキーパーソンとの協力関係を、よりコミュニティー本位の姿勢で強化して行くことが求められるといえる。

E. 結語

東北のゲイコミュニティーに対して予防啓発活動を開始し、コミュニティーのキーパーソンとの関係作りを進めることができた。コミュニティーが小さく、支える人材も不足しがちな中、より状況に則した協力関係の構築が求められる。

F. 発表論文等

論文

1. 佐藤　功：宮城県でも感染拡大の HIV 感染症、宮城県医師会報 716:15-17、2005.
2. 田上恭子、佐藤 功、伊藤俊広、菅原美花、鈴木智子：東北地方における HIV 感染者への心理的支援に関する研究～HIV カウンセリングにおける情報提供に着目して～弘前大学教育学部記要 94：117-123. 2005.
3. 片倉道夫、佐藤　功、伊藤俊広：HIV 感染症に合併するトキソプラズマ症の実態調査、エイズに合併する寄生虫症、発行：フリーズ社 15－17、2005.

学会発表

1. 鈴木博義、伊藤俊広、他：病理組織診断に苦慮している脳病変をもつ AIDS の 1 例、第 12 回東北神経病理研究会、2005 年 10 月 15 日、福島
2. 伊藤俊広：東北地方における HIV 感染の現状、第 16 回日本エイズ教育学会、2005 年 10 月 16 日、仙台市
3. 小住好子、伊藤俊広、佐藤　功　、菅原美花、他：HIV 専門外来における薬剤師の関わり、第 43 回東北地区国立病院機構薬学研究会、2005 年 11 月 26 日、仙台
4. 伊藤俊広、佐藤功：当院の性感染性 HIV/AIDS 患者における STD の実際、第 19 回日本エイズ学会、2005 年、12 月 1 日、熊本
5. 宇佐美修、佐藤　功、他：東北地方の HIV 感染者の臨床症状とウィルス特性、第 19 回日本エイズ学会、2005 年 12 月 1 日、熊本

厚生労働科学研究費補助金 エイズ対策研究事業
男性同性間のHIV感染対策とその評価に関する研究

東京地域における同性間のHIV/STI感染予防啓発の普及促進に関する研究

分担研究者　佐藤未光（Rainbow Ring代表、ひかりクリニック）
研究協力者　荒木順子、石川毅、江島啓介、河辺宗知、柴田恵、松永夢暁（Rainbow Ring）、張由紀夫（エイズ予防財団、Rainbow Ring）、日高庸晴（エイズ予防財団、京都大学大学院）、木村博和（横浜市南福祉保健センター）、市川誠一（名古屋市立大学看護学部）

研究要旨

東京地域における男性同性間のHIV/STI感染予防啓発を目的として、早急かつ有効な啓発普及の検討をおこなった。東京のゲイコミュニティの規模と多様性を考慮し、コミュニティに根ざした予防啓発を推進するために、当事者参加によるCBO（Rainbow Ring）との協力体制のもと、予防啓発活動の展開を図って検討した。成果は以下のとおりである。

1）コミュニティセンター「akta」の利用や来場者が増加し、特に「PRHYTHM」はイベント好きな層を呼び込む効果があった。利用・来場したキーパーソンとのネットワークの形成と、ネットワークを活用した啓発資材・啓発プログラムの開発や実施が促進された。4月から2月までの延べ来場者数は9,545名となった。

2）新宿2丁目の商業施設に毎週コンドームアウトリーチを行う「デリヘルプロジェクト」は、コンドーム以外の資材の配布、商業施設とのコネクションの形成、Rainbow Ringの広告塔としての機能を併せ持ち、配布人員は各回6〜11人、135〜143軒の店舗に対し、今年度実施した40回で42,590個（1,065個/回）のコンドームを配布した。また、若いスタッフの受け入れ口にもなり、ボランティアスタッフ向けの講習会を開催するに到った。

3）東京近郊の約90に及ぶハッテン場等の商業施設との連携については、昨年度に引き続き、施設経営者と顧客に対する意見交換会「Fucks! café」を開催し、そこで収集した意見をもとに啓発資材「Fucks!」を商業施設に配布した。

4）東京都や新宿区保健所などの行政機関と、ゲイコミュニティ内で活躍するアーチストやデザイナー等との協働ネットワークの担い手となり、コミュニティに検査や医療の情報を提供した。

5）NPO法人「ぷれいす東京」との協働で、陽性者との共生を視点に入れながら予防啓発を推進するLiving Together計画は、「Living Together Lounge（音楽とリーディングの夕べ）」を毎月継続しておこなった。

6）Living Together計画の一環として、クラブイベントを対象としたEASY!キャンペーンと、ハッテン場を対象としたバレンタインキャンペーンをおこなった。いずれもコンセプト（陽性者との共生・生きることや健康の大切さ）を明確にし、メディアを使って大きく広報をおこない、インパクトのあるキャンペーングッズを作製して配布した。

コミュニティセンター「akta」を予防啓発活動の拠点として、各商業施設やメディア、NPOや行政、コミュニティ内で活躍するデザイナーや写真家・モデル・オーガナイザー・DJなどの各分野のキーパーソンとの啓発ネットワークが構築された。このネットワークを活用した予防啓発プロジェクトを推進することにより、ゲイコミュニティにアプローチする啓発体制が構築され、訴求性のある啓発資材の開発と、その普及方法に一定の成果を得ることができた。また、若年のMSMが予防啓発活動に参加することで彼ら自身が啓発され、自発的に活動に関わる人材を育成する体制も確立されつつある。今後もこれらの体制を強化・拡大しつつ、より個別・専門的なニーズにも対応できるような啓発プログラムの開発を推進していく。

A. 背景と目的

厚生労働省エイズ発生動向における性的接触によるHIV感染者・AIDS患者報告数はいまだ増加が続いており、男性同性間の性的接触による感染がその過半数を占めている。地域ブロック別では、東京およびその近県での増加に加え、近畿ブロック（大阪）、東海ブロック（愛知）、九州ブロック（福岡）などの都市部での増加が目立ってきてい

る（図1）。また、市川ら、内海らによると、東京、大阪、名古屋地域でMSM（Men who have sex with men）のHIV受検者における陽性率は2-3%であり、梅毒抗体陽性率も一般に比べ高いことから、HIVを含む性感染症（STI）に対する有効な予防対策が必要であることを示唆している。

HIV/AIDSおよび他のSTIがMSMの間で流行してきた背景として、1）これまでの国民向けエイズ対策はMSMに訴求効果を示していない、2）これまでのMSM向けの啓発資材開発や啓発普及は十分でなく、MSMに対する効果的なエイズ対策がない、3）保健所等の無料HIV抗体検査・相談等の普及および受検者への性感染症予防介入が十分でないことがあげられる。

わが国の男性同性間のHIV/AIDS流行防止に有効な対策を構築するには、1）MSMに訴求性の高い啓発資材および有効な普及方法の開発、2）予防啓発が届きにくい、避けてしまう層に対して予防意識を啓発する資材とその普及方法の開発、3）ハッテン場等の商業施設におけるコンドーム使用を促進する効果的な啓発手法の開発、4）ゲイ・NGOやゲイコミュニティと連携した有効な啓発普及体制の構築、5）地域におけるMSM対象のエイズ施策を構築する行政-NGO間の連携推進、6）HIV/STI検査機会の拡大とセクシュアリティを解した受検時の予防介入方法の開発、などを早急に検討する必要があると考える。

当研究は、日本国籍男性の同性間性的接触によるHIV/AIDS報告数が超過半数を占める東京およびその近県地域において（図2）、MSMを対象としたHIV/STI感染予防対策を推進すべく、訴求性のある啓発資材および実効的な普及方法の開発を目標としている。東京のMSMへの予防啓発をコミュニティベースで取り組むために、当事者参加によるプロジェクトを構築し、コミュニティと連携した予防啓発活動を展開するための方法を模索している。

東京を中心とするゲイコミュニティとしては、新宿2丁目を中心とした商業施設（約300軒のゲイバー、ゲイショップ、クラブ、ハッテン場など）が集積している地域（以下新宿2丁目）が、日本最大規模の地域型コミュニティとして存在している。新宿2丁目はゲイ・バイセクシュアル男性が集まり交流する場としての歴史も古く、現在でも一日に数千人のゲイ・バイセクシュアル男性が出入りをしており、週末にはクラブイベントなども開催されるために全国からアクセスがある。ただし近年では、新宿2丁目以外にも商業施設が存在するようになり、主に上野・浅草地域、新橋地域、渋谷地域に集積している傾向にある。また、都内には約80軒のハッテン場が存在しているが、それらは点在している。メディアとしては主なゲイ雑誌社が都内に存在しており、それらに対する効果的なアプローチは東京のみならず全国に波及する可能性がある。しかし一方でインターネットの普及などにより、地域型コミュニティやハッテン場やゲイ雑誌にアクセスせずにゲイ活動をする人も増加してきており、東京地域のゲイコミュニティと言ってもその多様性は拡大しつつある。

HIV/AIDSやSTIに対する認識（知識や情報、予防行動）は、以前から我々が行ってきた調査によると、一般の国民と比較すると高い傾向にあるものの、認識の低い層も高率に存在していた。特に若年層は認識が低い傾向にある。

以上に示したような東京のコミュニティの多様性や、HIV/AIDSやSTIに対する認識の多様性を考慮しながら、効果的な予防啓発を推進するためのプログラムを実施する必要がある。

2002-2004年度は、東京のMSMへの予防啓発をコミュニティベースで取り組むための当事者参加によるプロジェクトの構築、予防啓発活動の拠点としてのコミュニティセンターの設立、ハッテン場・バー・クラブイベントなどの商業施設との協力関係の構築、デザイナーや写真家・モデル・オーガナイザー・DJなどのキーパーソンとの協力関係の構築、行政・医療機関との協力関係の構築、他のNPOとの協働の模索など、予防啓発のための体制作りを中心におこなった。さらにMSMに訴求性のある予防資材・予防啓発プログラムを検討してきた。

2005年度は、過去3年間に構築してきた体制をさらに拡大・強固にしつつ、その体制を基盤にして、より効果的な予防資材・予防啓発プログラムを開発・実践することを目的とする。

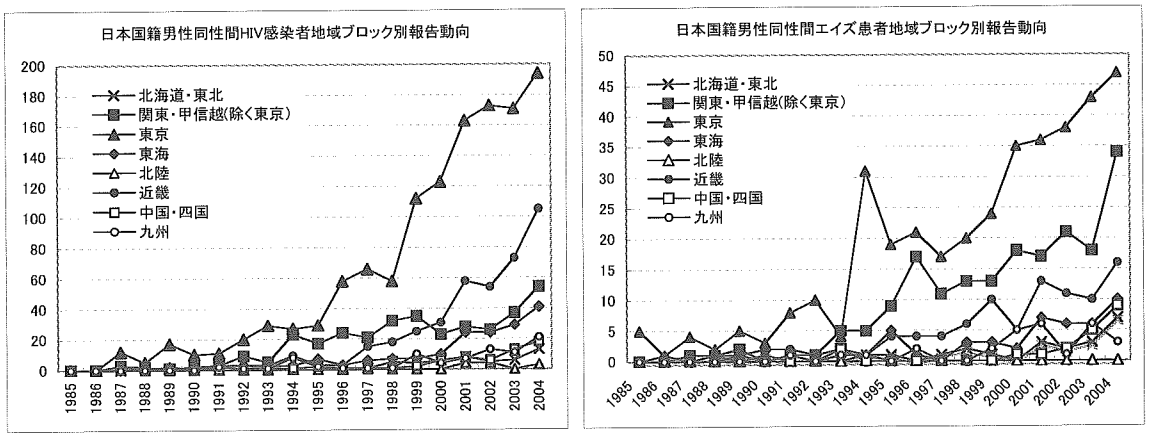


図1

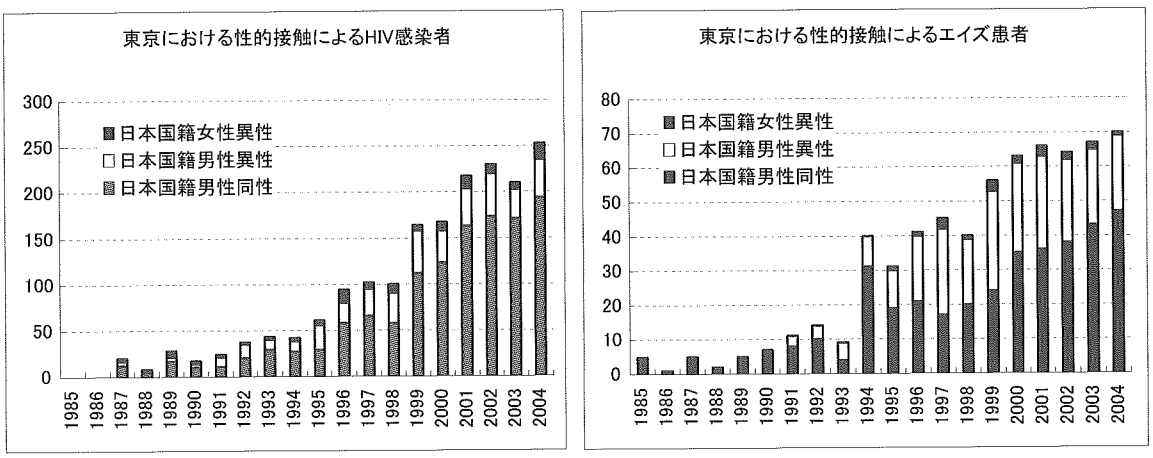


図2

B. 研究方法

1. 研究体制

本研究を始めるにあたり、地域ボランティア、イベント関係者、メディアや商業施設等の従事者などからなる地域ボランティア団体（CBO）として Rainbow Ring を結成し、研究協力体制の構築を図った。Rainbow Ring は啓発資材開発およびその普及を行うが、スタッフ各自がもともと有しているネットワークを活用しつつ、既存のゲイ NGO、ゲイメディア、ゲイビジネス等の関係者から協力を得るなどによって、予防啓発のためのネットワークを構築している。

Rainbow Ring は予防啓発活動の拠点として、新宿2丁目内にコミュニティセンター「akta」を設立し、運営している。「akta」は（財）エイズ予防財団の委託事業として設立された。

また、本研究で試行する啓発資材、普及方法の有効性についての評価は研究者が担当し、さらに地域での MSM を対象とするエイズ施策の継続性のために東京および近県の行政との連携を図っている。

東京では、エイズが問題となった当初からゲイ NGO が様々な活動を展開してきている。本研究は、今なお増加が続いている MSM における HIV 感染に対して、新たにその予防啓発の促進を目標として実施するものである。これまでの既存のゲイ NGO の成果を損ねることなく、Rainbow Ring を通じてこれらの NGO と協力連携しつつ予防対策の有り方を検討したい。

2. 予防啓発計画

1) 第2期第1次予防啓発計画(2005 年度)

2004 年度までの予防啓発活動（第1期）においては、新宿2丁目におけるバーを中心とした商業施設へのネットワーク、都内ハッテン場へのネットワーク、クラブイベントへのネットワーク、東京都内及び近隣県の行政とのネットワーク、HIV 陽性者支援 NPO とのネットワークを構築してきた。また、コミュニティセンター「akta」は予防啓発活動の拠点であると共に、コミュニティセンターとしての利用を推進することで、ゲイコミュニティ内のキーパーソン（デザイナーや写真家、モデル、オーガナイザー、DJ、商業施設経営者などコミュニティ内で活躍している人々）とのネットワークを形成する場となった。今年度はこれらの関係を継続・強化・拡大しつつ、そのネットワークを活用して、より効果的な予防啓発を実践する。

また、ゲイコミュニティは一般に比べ感染率が

比較的高いが、感染者は可視化されにくいがゆえに、いまだにHIVに対する認識が低い層が存在する。その層に対するアプローチを意識して、「感染者との共生」を念頭に置いた予防啓発活動を展開する。

具体的には以下のプログラムを計画した。

1) コミュニティセンター「akta」の周知を図り、利用を促進する
2) コミュニティセンター「akta」を通してキーパーソンとの関係づくりを促進する
3) コンドームや啓発資材のアウトリーチのためのデリヘルボーイの活動を継続し、新宿2丁目の商業施設との協力関係を確立する
4) スタッフを対象とした講習会を開催し、経験・知識の浅いスタッフの底上げを図る
5) ハッテン場との連携を継続しつつ、利用者への予防啓発をおこなう
6) 行政と連携して、訴求性の高い啓発資材・広報資材を作製する
7) 既存のNPOやキーパーソンとの協働による予防啓発活動の広がりを図る
8) 既存のクラブイベントと協力関係を構築し、アンケート調査や普及啓発に協力していただく
9) オリジナルの啓発資材を開発し、キャンペーンなどを通して配布し、コミュニティに広く普及啓発を図る
10) ゲイ雑誌やインターネットなどのメディアを介してRainbow Ringの活動の周知を図る

3. 倫理面への配慮

男性同性愛者／両性愛者は、社会からの偏見・差別が強く、啓発活動を進める場合はこれらを配慮する必要がある。このため、本研究では、当事者と連携して調査、啓発等の内容を検討し、対象者を含めゲイコミュニティへの倫理的配慮を保ちつつ研究を進める。コンドーム啓発プログラムをゲイコミュニティに浸透させるためには、バー、クラブ、ハッテン場等の施設の協力が必須で、研究の主旨等を説明し、施設経営者等との相互理解、信頼関係を構築している。

C. 研究結果

1. コミュニティセンター「akta」

コミュニティセンター「akta」は、MSMを対象としたコミュニティベースの予防啓発普及の拠点を目的に2003年8月設立された。運営はエイズ予防財団の「男性同性間のHIV/STI感染予防に関する啓発事業」を受託してRainbow Ringがおこなっている。ゲイコミュニティに根ざした予防啓発活動をするために、また無関心層を呼び込むためにもアクセスのしやすさを考え、ゲイ商業施設等の集中している新宿2丁目に設立し、入りやすくくつろぎやすい雰囲気を第一義に考えた。また展示も可能なスペースとした。事務局員が連日交代で勤務し、年末年始を除き連日16時から22時まで開場している。

aktaは以下の活動をおこなっている。

・情報提供（予防啓発に関わる情報およびコミュニティ情報）
・リソースの開発・紹介
・啓発資材配布の拠点（資材の作製・梱包・配送・アウトリーチ等）
・HIV/AIDSに関わる人たちの利用（ミーティングや研修など）
・学習の場（ワークショップや講演会など）
・コミュニティスペース（ドロップインスペース、展示スペース、打ち合わせやミーティングなど

1) 来場者の動向

今年度のaktaへの1日平均来場者数の推移は以下のようである。月によりイベントの数によって来場者数に差違があるが、年間を通して昨年より増加している。

aktaでは初来場者に対してアンケートを依頼し、年齢・セクシュアリティ・居住都道府県・aktaの認知について調査をしている。今年度の回答数は146で、以下の結果であった。

・10歳代後半から30歳代の来場者で95%を占め、40歳代まで含めるとほぼ100%である。これは昨年度までの傾向と変化無い。
・ゲイ・バイセクシュアル男性の来場者が80%で、昨年に引き続き、我々がターゲットとしている層が、来場していると思われる。
・居住地は東京都が50%で、その近県からが30%である。昨年度に比べて、関西地方などの遠方からの来場者が増えている。
・認知は口コミが55%で最も多いが、その他の「ゲイ雑誌」「パンフレット」「看板」「催し物会場として」「インターネット」がほぼ10〜12%と同数であり、どれもが重要な認知の材料になっていると考えられる。特に昨年のアンケートで指摘され、作製した「立て看板」を見て立ち寄った人が12%に及んでいたことは特筆すべきで、看板を見て興味を持ち、ふらっと立ち寄った（ドロップインした）人がいたことも推測される。ただし、イベント時は来場者が多数に及ぶため、初来場者全員にアンケートを依頼するのは困難である。よって

表1　「akta」1日平均来場者数

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月
31.4人	26.8人	29.3人	27.7人	44.8人	23.0人	38.9人	30.8人	29.7人	28.6人

「催し物会場として」認知される場合はもっと多いと推測される。
・自由記述欄の内容では昨年と同様に、aktaの雰囲気についての好感（落ち着ける・ステキ・清潔・親切・入りやすい等）と、再来場したいとの意志がほとんどであった。また、このようなセンターの存在を歓迎（有意義・生産的・コミュニティのために必要等）、啓発資材に触れたことの感想（知識を得て良かった・知りたいことがわかった・はじめて知った等）、予防啓発活動への関心や応援（これからも頑張って欲しい・自分も役に立ちたい等）も多く見られた。

2）aktaの利用状況

aktaは様々なミーティングやイベント、展示会などに利用されているが、今年度公開としておこなわれた展示会・講演会は、

・Tonbow Exhibition「PARTY PEOPLE」(4/16-17)
・The小原展「We Love 2chome」(4/18-30)
・Sex the Exhibition「生はヤメてよ！」展(5/1-14)
・大吾yライブ（6/5）
・51LOW展「Laugh&Peace」(7/25-31)
・竹之内祐幸写真展（8/12-27）
・On the Sunny Side of the Street（LT計画）(8/13)
・カメレオン・ジャーニー展（9/1-10）
・トークイベント「こんな性教育をして欲しかった！ー性教育で同性愛やHIVをどう教えるか。保健体育科の先生と語る」(9/4)
・Robomi OS展（9/17-30）
・GUTS映画上映会（10/9）
・蜂SD Exhibition「HOME」(10/10-16)
・話を聞く会第1回「当世売り専人情話ー私が出会ったミドルのお客さん達」(10/23)
・サトウタカシ写真展「like a moth」(10/17-23)
・TOKIO展「Portrait 2005」(10/30-11/12)
・話を聞く会第2回「みんなでパレードーコミュニティイベントを引き受けるということ」(11/20)
・直道個展（11/21-11/30）
・上映・講演会「僕らとHIV/AIDSの本当の距離ー今できる性（生）き方ー」(12/4)
・Photo Exhibition「Paradise Ball The Greatest Hits」展（12/14-22）
・話を聞く会第3回「デリヘルボーイとともにー若ゲイたちとHIVを語る」(12/18)
・ジャンジ展「HUGたいそう」(12/25-1/9)
・田口弘樹写真展（1/10-15）
・講演会「セクシュアルマイノリティと学校ー養護教諭ができること」(1/14)
・「candy」展YAMADA（1/16-29）
・my first safer sex展（2/18-3/5）

である。また、定例的に、マッサージ教室、手話教室、韓国語講座、バザーなどに利用していただいている。来場者の増加は、昨年に比してイベントの数が多くなったことの影響があると思われる。

今年度も展示をしていただいたことをきっかけに、多くのアーチストにRainbow Ringの活動に関わっていただけるようになった。予防啓発に直接関わりのない内容の展示であっても、アーチスト自身が啓発資材や啓発活動に触れることにより、新たに興味を持ったり、以前から関わりたかったのを実現させる機会になっていると思われる。Rainbow Ringが作製したコンドームや各種パンフレットなどの資材のデザインなどは、最近ではそのほとんどを、展示をきっかけにRainbow Ringの活動に興味を示していただいたアーチストに依頼している。

3）相談

来場者から相談があった場合には、aktaにある資材や相談機関の紹介を原則にしている。相談内容として多いのは「HIV」に関して（主に「HIV検査機関」「感染不安」「治療について」「感染者周囲のケア」など）で、ついで「性感染症」「脱法ドラッグ」があった。相談に対しては話を傾聴するように努めた。また、緊急を要する場合のために、検査・医療機関や治療についての資材をそろえ、インターネットを利用して情報が引き出せるように工夫をした。

4）マンスリーakta

aktaの情報紙を毎月発行しており、デリヘルプロジェクトやハッテン場プロジェクト、イベント折り込みを通じて配布している。当初はaktaのスケジュールや催し物の情報のみを記載していたが、8月からはコミュニティ情報、医療や検査情報、Rainbow Ringの予防啓発活動の紹介も掲載するようになった。表紙にはコネクションのできたアーチストによるイラストや写真を掲載し、aktaの情報と同時に、様々な情報を複合的に楽しく受け取ることができるように工夫をしている。毎月5,000部発行している。

5）PRHYTHM

Rainbow Ringスタッフであり、企画者であるDJと毎回変わるゲストDJによる音楽を楽しむイベントで、毎月最終日曜日に開催している。目当てのDJを求めてイベントに参加するような「クラブ好き」の人達をターゲットに、aktaの認知を広げるために企画されたイベントである。また、ゲストDJにとっても、普段クラブに行かないような人達に対して、クラブの楽しさを伝え、自分の音楽への関心を高めてもらうための機会となっている。クラブイベントではDJは重要なキーパーソンであり、クラブイベントへのアプローチをしていく上で、DJとの関係づくりは重要であると考えている。各回約60ー150人の来場者があっ